

大雪山国立公園表大雪地域 登山道関係者による冬季情報交換会 概要

日 時：令和元年 12 月 16 日（月）13:00～16:05

場 所：東川町農村環境改善センター ホール

出席者：資料のとおり（出席者名簿のうち、大雪山国立公園パークボランティア連絡会 金野氏、北海道大学大学院地球環境科学研究院 小林氏、大雪と石狩の自然を守る会 竹田氏が欠席）

- ・開会前に、大雪山国立公園の管理運営に長年にわたり貢献され、令和元年 10 月に逝去された（有）風の便り工房・佐藤文彦氏に哀悼の意を表し、黙とうを行った。

1. 開会

2. 挨拶

■上川自然保護官事務所

- ・情報交換会は平成 23 年度末からはじまり、それ以降年 2 回お集まりいただき、今回で 17 回目となる。年 2 回集まることで、情報交換・共有する場としては一定の成果はあったと思う。情報交換会の直接の目的は、皆さんの活動状況を共有し、それぞれの活動の参考にして活かすということ。しかし、これまで二年間開催してきたワークショップなど色々な場面を通じて、皆さんの中には、本当は大雪山国立公園の課題をしっかりと解決したい、大雪山の保全・利用をそれぞれ良くしたいと言う思いが強くあると感じた。そこで、情報交換・共有に加えて、課題の解決について議論し、取り組み、実行していく体制にする必要があると議論を重ねてきた。
- ・情報交換会をこれらの新しい機能を付加した体制にしていくため、大雪山国立公園連絡協議会もとの登山道維持管理部会として位置づける。今回はその準備の大切な情報交換会となるため、円滑な場となるよう御協力をお願いしたい。

3. 情報交換

(1) 各団体からの報告

- ・事前に各団体から提出のあった今年度の活動予定については資料 1～資料 11 に取りまとめ、環境省、上川南部森林管理署、上川総合振興局環境生活課、上川総合振興局上川南部森林室、美瑛山岳会、北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺教授、北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授、山のトイレを考える会、NPO 法人大雪山自然学校、大雪と石狩の自然を守る会から資料説明が行われた。
- ・なお、資料提出し欠席した上川総合振興局商工労働観光課は東川自然保護官事務所、十勝総合振興局環境生活課は上川総合振興局環境生活課より説明を行った。
- ・資料に記載された内容の他に補足説明がなされた内容や資料提出がなかった団体からの発言は、以下のとおり。
(出席した上川中部森林管理署、富良野市、上川町、東川町・旭岳ビジターセンター、上富良野町、公益社団法人日本山岳会北海道支部、上富良野十勝岳山岳会、富良野山岳会、層雲峡ビジターセンター、山岳レクリエーション管理研究会、株式会社りんゆう観光、合同会社北海道山岳整備・一般社団法人 大雪山・山守隊、山岳ガイド協会表大雪地区連絡調整室、山楽 BEAR、大雪山倶楽部、NPO 法人かむいから資料提出はなかった。)

- ・資料に記載された内容の他に補足説明がなされた内容や資料提出がなかった団体からの発言は、以下のとおり。

■上川総合振興局環境生活課

- ・地域政策推進事業は5カ年を1区切りとしているため、来年度は、これまで行ってきたことをそのままの形で行う予定はない。
- ・登山道補修イベントを8月18日(日)黒岳石室周辺で実施。8月17日(土)に行う予定で元々の申込みは53名あったが、台風が来たため急遽翌日に延期した。ここ数年、大人数の方に参加していただける企画になっている。当日、フランス人が飛び入りで参加していただき、色々なところから関心を引いている。
- ・登山道補修イベントについては、現時点では確定的なことは言えないが、来年度以降も続けることで計画している。
- ・姿見の池園地改修工事測量設計を実施した。姿見の池園地の手すりがむき出しになっていたり、標識が傾いたり、文字が見えなくなっていたり、ベンチも座るところが取れていたりしていることに対応する予定。自然解説標識も内容を一部更新する予定。工事については、来年度だけでは予算的に難しそうなため二カ年に分けて行う予定。
- ・黒岳トイレの維持管理については、今年度の協力金収入は約89万円だったのに対し、昨年度は91万円です若干下がってしまった。環境省が発表した黒岳登山者数が1万9千人程度だったが、昨年度は2万9千人で、今年は黒岳の登山者数が1万人減っている。黒岳石室の利用者数は昨年度2,400名に対し今年は2,150名と減っていることを踏まえると、協力金徴収率はむしろ上がったと考えている。

■十勝総合振興局環境生活課(上川総合振興局環境生活課 代読)

- ・ヒサゴ沼避難小屋改修工事については、1回目の入札では事業者が決まらず、事務が遅れるなど、皆さんも非常に気を揉んだと思うが、現地での工事は9月下旬から行い、天候にも恵まれ、苦労はしたが、当初の予定はほぼ終えた。外壁交換・屋根補修・ハンゴ付け替え・トイレ上屋建て替え等を行ったが、内装やトイレの便槽はそのままである。しばらくは避難小屋としての機能を保つことができる。この件に関しては、皆さんや旭岳や層雲峡ビジターセンターの皆さんには問合せが多かったと思う。対応感謝。小屋周辺の木道も荒廃していたが、特に危険な部分だけ敷板を撤去、交換するような最低限の補修を行った。

■美瑛山岳会

- ・美瑛富士避難小屋は平成8年の建設から25年以上が経過し、窓やドア周りから雨が入り込んでいるため、美瑛町が主体となり、補修・修繕を行い美瑛山岳会も廃材の荷下げを行っている。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 渡辺悌二

- ・登山道荒廃調査は、例年行っているドローンによる調査である。
- ・野営指定地の調査に関して、黒岳・裏旭・白雲岳野営指定地で小型自動撮影機を設置し、毎日1時間間隔で撮影できるよう7月中旬から9月下旬まで調査している。黒岳石室では宿泊名簿を利用者に記入してもらい、毎日の宿泊者を記録している。白雲岳避難小屋でも同様の調査を行っている。
- ・アンケート調査は各地で行わせてもらったが、野営指定地の利用者を対象にしたもの、銀泉台一赤岳、黒岳一旭岳の登山者を対象にしたものを行った。訪問目的やグループ

構成、登山経験、装備、どこまで行ったのかを聞いたほか、小型のGPSを付けていただき登山者の動向調査や、エコツアーリズムに関するアンケート調査を行った。調査に当たっては、旭岳ロープウェイ駅舎、黒岳ロープウェイ駅舎、層雲峡ビジターセンターなど多くの場所で行わせていただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

■北海道大学大学院農学研究院 准教授 愛甲哲也

- ・侵食防止マットの施工による高山植生の回復の調査を実施。実際に裾合平の侵食防止マット施工地では、数多くのチングルマの実生が回復してきていることが確認できた。現在、各施工した年代、出てきた実生の個体の数の比較の分析を行っている。
- ・アンケート調査に関しては、環境省の協力金に関するアンケート調査やさきほど報告された渡辺先生の研究室のアンケート調査もあったため、事前に日程を調整させて頂いた。また、登山行程のフォーマットの回答欄についてもあとで共有できるように調整させていただいた。今年の調査では、この点が非常に良かったと感じている。
- ・認知度について、携帯トイレ普及宣言については、集計後に詳細に調べてみた結果、携帯トイレの普及を大雪山でやっていることを知っているが、「大雪山携帯トイレ普及宣言」そのものを知っていると回答したわけではないのではないかと、と分析している。
- ・来年度、白雲岳避難小屋の改修工事については、大きな影響があると思われるため詳細に知った時期によって行動がどのように変わるか分析をしているため、結果がまとまったら皆様にご報告させてもらう。

■山のトイレを考える会

- ・美瑛富士避難小屋に常設の携帯トイレブースが建設されたが、今後は美瑛町・環境省、美瑛富士トイレ管理連絡会が協定書を結び、継続的に維持管理を行っていく。
- ・南沼汚名返上プロジェクトの活動の中で、3年目でトムラウシ南沼に2基目の携帯トイレブースの設置が実現した。地元のトムラウシ小中学生の皆さんは毎年南沼で携帯トイレを配布する活動等を行っているが、これとコラボレーションし、地元の方々と一緒に地道な活動ができた。
- ・一番大きな成果としては、行政機関と民間団体が協働する仕組みを構築して、活動できたこと。また、協働することが一番成果が上がる大きな要因だと思っている。

■NPO 法人大雪山自然学校

- ・旭岳姿見の池園地及び周辺登山道の保護ロープの設置回収を実施。
- ・毎年6月～10月までレクチャーをやっていたが、今年は利用者層が変わったこともあり、実験的にレクチャーは希望者のみにして、主に外国人や登山者に声をかけるようにやってみた。利用者がドローンを飛ばしたり、排泄問題があったので、マナーの普及も行っている。
- ・携帯トイレの販売は、旭岳ロープウェイの売店に委託して販売していたが、ロープウェイの都合上、9月から販売が難しくなり、旭岳自然保護監視員が常駐している姿見駅舎内の案内カウンターで販売を始めた。案内カウンターの営業時間の関係で携帯トイレ自動販売機が必要だと思っている。
- ・旭岳石室の携帯トイレブースは扉が風で飛ばされたり、壁が壊れたりしていたので、それを修繕し9月から使えるようになった。
- ・天人峡羽衣の滝遊歩道のトイレは、8月から電気が届かなくなったためトイレが使えない状態が続いている。
- ・山じまい祭りは、旭岳地区の活性化や利用者との交流や、夏山と冬山のけじめをつけ

る目的で開催した。

■大雪と石狩の自然を守る会

- ・「ひぐま大学」は定員 25 名とし、36 年間継続し、利用者はこれまでのべ 2,000 人を越えた。5 月から活動がはじまり、11 月で活動が終了し、2 月にも一度開講する。大雪山で行う活動は 7 月から 9 月で 3 回行い、講座に先立ち、予察を必ず行うが、それに併せてセイヨウオオマルハナバチモニタリングや登山道を含めた環境調査も行う。

■上川総合振興局商工労働観光課(東川自然保護官事務所 代読)

- ・北海道では、アドベンチャーtravelを推進している。北海道がなぜ適地なのかというと、北海道には多様な自然環境があること、アイヌ文化・縄文文化などの多様な文化があるため。北海道では 2021 年秋にアドベンチャーtravelの国際サミットを誘致しており、それに向けて色々な活動が行われていく予定。

(2) 質疑応答

■北海道大学大学院農学研究院 准教授 愛甲哲也

- ・担当の方がいらっしゃってないが、上川総合振興局商工労働観光課のアドベンチャーtravelについて、なぜこの情報交換会で報告されたのか意図を聞きたい。何が言いたいかというと、北海道はアドベンチャーリズムに適しているという話があったが、大雪山のトイレや登山道のことを考えると、こういったものを受け入れるインフラ整備はされていない。この状況で、再来年にはサミットや大規模なツアーや商品を送り込む話が出ている。登山道について話をする場で、この報告をされたのは、北海道のアドベンチャーtravelの担当部局が登山道の課題にこれからコミットすると思っこの報告をされたのか、分かる範囲でお答えいただきたい。

■東川自然保護官事務所

- ・商工労働観光課から大雪山国立公園の中でアドベンチャーtravelに関する事業が行われることを関係者の皆さんに知っていただきたいということで事務局にご提案いただいた。登山道関係者の皆さんにもこの動きを知っていただきたい、ご紹介をさせていただいた。
- ・アドベンチャーtravelに関するワークショップの中でも、大雪山や登山道がどのような状況であるかも伝えているところ。

■上川総合振興局環境生活課

- ・この話題を提案したのは私の方で、大雪山も主要フィールドとなりうる事業なので、情報は皆さんにも入れておいた方が良かったと思った。毎年、アドベンチャーtravelの世界大会は何処かで行っているが、2021 年は北海道で開催が決まり、世界中からアドベンチャーtravelに関わる業者などが来ることが予測される。登山道の維持管理をやっていく上で、皆さんにも影響や考えるべきことが出てくると思い、情報共有のために商工労働観光課にここにきて説明して欲しいと依頼をしたが、本日担当が欠席となり、環境省が代理で説明してくれた。おそらく、登山道に関わる皆さんの多くはアドベンチャーtravelに関する動きをあまり知らないのではと思っており、なるべく早く情報共有をした方が良くと考え報告を提案した。

■北海道大学大学院農学研究院 准教授 愛甲哲也

- ・北海道の中では、受け入れ側の自然にどういった影響があるか等議論はされているの

か？

■上川総合振興局環境生活課 福井

- ・残念ながら、ほとんどされていない。同じ北海道という立場で、私たちは自然環境を保全する立場として、もう少し連携し、意見を述べる必要があると思っている。現状ではそれほど連携は取れていない。

■北海道大学大学院農学研究院 准教授 愛甲哲也

- ・受け入れ側の課題について、アドベンチャートラベルを推進している部局にきちんと伝えて欲しい。

■上川総合振興局環境生活課

- ・本日欠席されている NPO 法人大雪山自然学校の荒井さんがキーマンの一人と承知しているので説明してもらえるとありがたかったが、別の場で話ができればと思う。

■合同会社北海道山岳整備・一般社団法人大雪山・山守隊

- ・今回、業務が忙しく資料を全く作ることができなかったのもので、報告はしないが、お礼だけを伝えたい。
- ・今年も5月ソリでの木材運搬から始まり、たまには山へ恩返し的活動等4,5回あった。北海道や環境省が主催のものや、こちらが自費でのものもあったが、皆さんに集まっただけ、少しずつ登山道を直すことができた。来年以降も色々やっていきたいのでご協力をお願いしたい。
- ・例年、(有)風の便り工場の佐藤文彦さんが高原温泉ヒグマ情報センターのことを報告していたが、今年から北海道山岳整備が業務を請け負い、ヒグマ情報センターの管理をしていた。ヒグマ情報センターとしては、事故がなく今シーズンを終えることができたが、登山道整備の崩れが激しすぎて手が付けられないことが多々あった。登山道を整備する予算がほぼない中、なんとかしなければと思いやってきたが、念願だった3年前に崩れた沼巡り登山コースの右回りの徒渉地点を施工して秋に1周が再開された。トイレブースを設置したり、情報発信も少しずつできはじめて、それに伴い行政や周辺ホテルの協力体制ができつつあるので、来年以降もこの協力体制を密にしてやっていきたい。

(3) 歩道等維持管理作業実施報告について

■上川自然保護官事務所

- ・歩道等維持管理作業実施マニュアルの目的は、歩道は国立公園事業として実施され、歩道管理者が存在するが、歩道管理者以外の地域の関係者が維持管理作業をする際の手順を明確化し、それによって、多様な主体の参加を得て登山道の荒廃を解決していくこと。また、補修作業の技術的な品質の確保、どこで誰がどんな補修作業を行っているか情報を共有するために始めた。
- ・実施の手順は、2年間の試行では、事前に実施者が計画を立てて、その内容が登山道技術指針に合っているかワーキンググループで確認して意見を出してもらう。そして、意見に応じて、計画書を修正し、実施し、報告するという手順になっている。
- ・事務局で把握している補修案件が、35件のうち、事後報告のみのササ刈り等が7件、補修作業が28件で事前に計画書の提出があったのは7件であった。
- ・補修件数が非常に多かったことは喜ばしい事だが、夏場の忙しい時期に計画書を作成してから作業を行うのは困難であり、実際の作業件数に対して計画書の提出が少な

ったと考えられる。またワーキンググループメンバーも忙しく、事前に計画書の提出のあった7件の検討も大変な状況であった。

- ・このままのルールで運用するのは、現実的ではないため、実行性、持続可能性はワーキンググループメンバーで集まって手順の見直しを検討する。

■各団体からの報告

- ・資料12「歩道等維持管理作業」について、NPO 法人大雪山自然学校、一般社団法人大雪山・山守隊、Asahidake trail keeper、合同会社北海道山岳整備、NPO 法人かむい、富良野山岳会、上川総合振興局環境生活課、上川自然保護官事務所、東川自然保護官事務所から資料説明が行われた。

(4) 質疑応答

■山樂舎 BEAR

- ・資料12 P34 NPO 法人かむい濱田氏の朝陽山からニセイカウシュッペ山のササ刈りについて、今回は濱田氏に伺ったので、今回は上川町と上川中部森林管理署に伺う。この報告書に、「事業執行者を設置できるように今後も活動を続けていきたいと考えておりますので、関係行政等のご理解・ご協力をよろしくお願いしたい」と書かれているが、事業執行者となると上川町になるのだと思う。この活動はクラウドファンディングなどで期待されている方がたくさんいると思うが、今後事業執行者が決まり、登山道として延伸できるのか伺いたい。

■上川町

- ・濱田氏からは現状報告をいただき、行政の方で事業執行してくれないかと言われた。これを受け、役場内では副町長まで話をあげたが、行政としてもどのような方法で、事業執行できるか検討したいところではあるものの、現状では事業執行者になることは難しいという判断であることご理解いただきたい。

■山樂舎 BEAR

- ・資料12 P64 上川中部森林管理署報告の緑岳の入口辺りの施工だが、実際本当に必要な施工なのか非常に疑問に思った。現場の方はこうした方が登りやすいのだと親切心でやったのだと思うが、現存の登山道では私は十分だと感じている。作業部会にはかかってやっていないし、現場の方の判断だけで変更して良いものか。登山道の施工後の評価をしっかりと考えてやった方が良いと思う。

■上川中部森林管理署

- ・現状、傾斜やササ、下草で足下が滑りやすいという判断の中で、こういう施行をした。施工が必要・不必要や、色々なやり方はあるのだと思うが、整備をするべきかも含めて、いただいたご意見は今後の参考にしていきたい。

■山樂舎 BEAR

- ・上川総合振興局環境生活課に聞くことだと思うが、天人峡羽衣の滝から先の敷島の滝までの道は以前は通行止めになっていたと思うが、秋に行ったら敷島の滝までは行けないが途中までは道がつけられていて行けるようになっていた。測量みたいな格好をした人がいた。この道の取扱いについて知りたい。

■上川総合振興局環境生活課

- ・振興局が答えることが適切かどうか分からないが、現状は羽衣の滝以降は通しているという認識はなく、東川自然保護官事務所にもその認識はないと思うが、最近、開発局の治山施設の関係で業者が入り込んでいるのは見ているので、道がはっきりついているのだと思う。振興局は、羽衣の滝以降の事業執行はしていない。

■山樂舎 BEAR

- ・実際にはササ刈りもしてあり、普通に行けるようになっているし、登山者も歩いていた。工事の関係であるなら、一般登山者には告知されていないはずなので、何かしないともまずいと思う。

■上川総合振興局環境生活課

- ・今日初めて聞いた話だが、そういったことであればもう少し分かりやすくロープを張ったりする対応は関係機関でできる。

■上川自然保護官事務所

- ・本来であれば、計画の検討を十分にできれば良いが、そうでないものも含めて、今年度の活動は全体を報告していただいた。計画が検討できなかったものについては、本来は別途、技術的なものはどうだったのか時間を掛けて検討する必要があるが、手順がうまく機能していないので、手順の改善をしっかりと、出してもらった計画に関しては何らかの形で議論をして、登山道補修の技術の質を高めていくことが必要だと思っている。皆さんから知恵をいただきながら、検討と作業実施、その後の対応・評価がうまくいけば良いと思っている。

■上川中部森林管理署

- ・情報提供として、沼ノ原へアクセスできる層雲峡本流林道が大雨で被災していたが、災害復旧工事が完了した。来年の融雪期の状態にもよるが、現段階では、来年度は林道が通行できる予定。

(5) 登山道維持管理部会体制について

- ・資料 13「大雪山国立公園の新たな協働型管理運営体制」について上川自然保護官事務所より資料説明が行われた。

■合同会社 北海道山岳整備、一般社団法人大雪山・山守隊

- ・改めて聞くが、どういうことが起きていて、何をするために、部会に移行するのか？

■上川自然保護官事務所

- ・改めて申し上げると、情報交換会は情報交換の機能しか果たせない。登山道の荒廃や施設の老朽化など山の課題は山積していて、これに関して、情報交換だけでなく、しっかり課題を解決していく取組をしていく必要がある。その取組に関して実際にどんなことをやるのか、方針を決めたり関係者間で調整をしたり、情報交換だけでなくアクションを起こす・方針を決めるところを追加しやっていくために部会にする必要があると考えている。

■合同会社北海道山岳整備、一般社団法人大雪山・山守隊

- ・その部会の必要性和民間団体からそういう代表者を選出するという繋がりがわからない。

■上川自然保護官事務所

- ・大雪山国立公園連絡協議会で国立公園の管理運営の全体のことを議論し、登山道のことについては部会で検討する形になる。登山道維持管理部会で検討した内容は全体（大雪山国立公園連絡協議会）に報告しないとイケない。その報告は基本的には我々事務局の方で対応はさせていただくが、部会の声をしっかり伝えるには、民間団体の皆さんの生の声で伝えることも必要かと思ひ提案している。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 渡辺悌二

- ・多分この中の何割かは全く同じことを考えていたと思う。情報交換会というのを部会としてちゃんとやっていくというのはわかるが、部会にしたことで代表は大連協に出席するという。だが、大連協はそこで何をするのか。大雪山国立公園連絡協議会は何処まで理解して、どこまで変えようとしているのか我々にはわからない。我々と大雪山国立公園連絡協議会の関係がわからないのに、いきなり部会と行って、何か変わるのだからか？というところがわからない。今までと違うことを大連協に期待して良いのか。部会の予算は大連協からとなっているから、そういったことは変わるのかもしれないが。大雪山国立公園連絡協議会はそれに合意をしているのか。もし合意をしていないなら、現在の大雪山国立公園連絡協議会と新しい大雪山国立公園連絡協議会何が違うのか全く分からない。
- ・以前もお話ししたと思うが、大雪山国立公園連絡協議会と名前を使うのは、1市9町が協力をしてもらうという上で必要なだというお答えだったと思うが、やっぱり大雪山国立公園連絡協議会の名前を変えない限り彼ら自身が何も変わらないと思う。器・名称は大事で、せめて大雪山国立公園総合型連絡協議会でも良いので何か変えないと彼らの意識が変わらない。我々が部会になったからと言って本質的に変わるのだろうか。そこがモヤモヤとしていると、多分これが部会になってうまくいかないと思う。

■上川自然保護官事務所

- ・今まで大雪山国立公園連絡協議会の動き・情報は確かに皆さんにご説明をする機会が少なく、反省する。しかし、大雪山国立公園連絡協議会の方でも今まで準備会を複数回開催しており、1月までに1回開催する予定。その中でも、大雪山国立公園連絡協議会は国立公園全体のことを議論し、登山道に関しては部会で議論するという体制は、しっかり話をしてくれている。もちろん準備会の中だけでなく、各自治体の担当者とも議論は積み重ねており、全ての町長とも直接お会いし、説明し、理解を得るなど、しっかりと対話は積み重ねてきた。その意味で、現在の大雪山国立公園連絡協議会を構成する自治体は、町長以下この体制で進めていくことに、高い期待をいただいている。現在の大雪山国立公園連絡協議会側の意識というのは、これまでの調整過程を踏まえて大丈夫だと思っている。
- ・これからは皆さんにもそういった状況をお伝える必要があるし、皆さんのご意見を大雪山国立公園連絡協議会に伝えていくことが必要だと思う。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 渡辺悌二

- ・そうすると、規約案の第一条に「本規約は大雪山国立公園連絡協議会の規約第10条第2項の規定に基づき・・・」と書いてあるが、これ自体変わらないとイケないこと

になる。大雪山国立公園連絡協議会は新しくなるはずだから、現在の規約は破棄してもう一度作り直さないといけない。それなのに、大雪山国立公園連絡協議会の旧規約をそのまま使って作るなんてことは、大雪山国立公園連絡協議会側からしたら何も変わっていないことにならないのか？これも新しい大雪山国立公園連絡協議会になったときに、古い規約を使うのは既に議論されていることなのか？

■上川自然保護官事務所

- ・大雪山国立公園連絡協議会の規約も新しいものに改めて、新しいことに基づいてということ。大雪山国立公園連絡協議会側も変わるし、変わったものに基づいて部会もやっていきたい。

■一般社団法人 大雪山・山守隊

- ・今は色々なところに登山道整備をして欲しいと頼んでも、どこに行っても予算がないと言われ、やりたくてもできないところがたくさんある。ごく一部について、予算づけの理由を行政の方が作ってくれて、少しだけ整備できるという状態。はっきり言ってこんな管理体制がいいとは全く言えない。アドベンチャートラベルで海外の人が見に来ると言うが、こんなに登山道が荒れて、標識もできていない、トイレも酷く、ほぼ管理がされていない状態は恥ずべき状況だと思っている。その現状を打破するものになるのか。今は法律が変わって、各市町村で入山料を徴収できるようになってきているが、そういうことが実際に動いていくようには見えない。そういうことが言える立ち位置に、部会や大雪山国立公園連絡協議会がなるのか？

■上川自然保護官事務所

- ・なるし、そうしないといけない。登山道維持管理部会は大雪山国立公園連絡協議会のもとで作る。はじめに、大雪山国立公園連絡協議会では大雪山国立公園ビジョンを作っていると紹介したが、300kmの登山道の荒廃を止めて、自然環境に配慮し利用できる状態になるような高い目標を持ってやっていかないといけない。300kmの登山道が1, 2年できれいになっていくのは無理だが、高い理想を持って、具体的に何ができるのか、どういうことをやっていくのかを考えていく場所になっていくはず。
- ・登山道維持管理部会では、具体的に管理者不在の登山道の補修をどうやっていくのかという議論、利用者負担の話も進んでいる中で山の上でこれをやるにはどうしたらいいのかという議論もできる。今までは、情報交換だけして、関係者中でくすぶっていたものを、解決に向けて動かすために真剣に議論する場になる。

■大雪と石狩の自然を守る会

- ・現在、登山道の荒廃が非常に大きな問題になっているので、そこに目が行きがちなのが、総合型協議会の中で大雪山をどういう風にしていくかが徹底的に議論されないといけない。私も何度か情報交換会に参加しているが、そろそろ情報交換会から脱皮して自分たちは大雪山とどう向き合うのかを話し合う会になって良いのではないかと提案したこともある。その後、自分自身からは具体的な提案ができた訳ではなかったが、その1つの結果がこれになったのだと思う。登山道だけでなく、動植物など大雪山の持っている価値っていうのは利用も大事だが、今世界中言われている多様性や生態系を含めた維持、地球温暖化まで繋がっているかもしれない。そういうことを徹底的に話し合っていく、その中で、登山道やトイレや動植物の個々の課題を話し合っていないと、登山道だけ突出してしまっているのは、どう

捉えたら良いか分からない。部会には他にどのような部会を考えているのか。

■上川自然保護官事務所

- ・大雪山国立公園の全体のビジョンは理念的なことになるが、現在、検討している最中。ビジョンが策定された後、大雪山の管理運営計画も新しく作っていかないといけない。大雪山を将来どうしていかないといけないのかももう少し具体的な中身も話合われる。ビジョン策定で終わりではなく、皆さんも含めて管理運営計画をしっかりと考えていかないといけない。登山道部会だけが突出しているように見えるが、色々な課題が協議会で話合われ、特に重要な登山道の課題に対して部会を立てているため、登山道以外は話合えないということではない。気候変動の問題含めて、登山道に関係あることは部会で話し合われるし、それ以外だと大雪山国立公園連絡協議会全体で話合われる。
- ・更に将来の話をする、事務局体制は環境省がやるが、もっと体制が手厚くなり、必要であれば更に専門的な部会を立ち上げる状況になると思う。まずは、重要な登山道の部会を設置して進めていきたい考えである。

■山樂舎 BEAR

- ・事務局は環境省がやるというが、将来的に独立した事務局をどこかに作って、例えば入山料の徴収や民間からお金を集めることなど、独立した組織としてやっていくビジョンはあるのか？

■上川自然保護官事務所

- ・将来的な像は今のところどこまで現実味があるかわからず、こういうビジョンを持っているとは言えないが、佐久間さんが仰ったことを私はまさに目指すべきだと思っている。
- ・知床国立公園には知床財団という財団があり、そこが公園管理の色々な業務を担う団体になっている。大雪山でも状況が許すならば、我々が行う事務局を、独立した機関が担って公園管理のための仕事をしていく体制になるのが理想だと思っている。それに至る道筋が描けないのは私自身も心苦しいが、将来的にはそうなるべきだと思う。

■山樂舎 BEAR

- ・非常に期待をさせてもらう。日本の場合は知床財団があるが、海外だとシエラクラブなどがある。そういうことを考えて、そこに向かっていくのはビジョン作りの中で重要なことなので、是非お願いしたい。

■上川自然保護官事務所

- ・色々な方法があると思う。潤沢な資金があれば、資金を元に財団を立ち上げることもあるし、シエラクラブのようにある活動していた団体が大きくなって公園管理をする団体になるとパターンもある。我々が事務局をやる体制を走らせてみて、そこに将来どのような芽が出るかよく見ていきたい。

■大雪と石狩の自然を守る会

- ・日本では国立公園は環境省の管轄と決まっている。それまでは国立公園ではどういった管理をしていくかは、北海道や市町村など行政だけに限られていた。今、新たに行政だけでなく民間団体や他の省庁も含めて広く多面的に意見を聞きながら、管理運営を進めていくのが総合型協議会だと思う。民を入れて話をしていくのは大事なことだ

と思うが、ある面では良いことづくめではなく、利用だけが拡大をして色々なリスクを背負う。方向としてはいいが、大雪山をどうしていくかビジョンをしっかりとさせる、その次にそれを具体的に運営させる管理運営を含めた規約を定めて、性格をはっきりさせていかないといけない。単なる意見を申す場ではなく、具体的に国立公園をどうしていくか力を持つために、具体的に能力をもった部会を、今のところは登山道部会だけだが、将来的には部会を増やしていくのが大事だと思う。その辺りのことを見通しながら、ビジョン作りや規約を作っていくのがよいと思う。

■ 合同会社北海道山岳整備、一般社団法人大雪山・山守隊

- ・ 2年ほど、部会の前段になる登山道のあり方を考えるチームに加えさせてもらった。ここは研究者、環境省、北海道、現場で登山道補修を担っている団体が集まり、登山道整備について話をする状態だった。これから部会ができて、もっとしっかりしたものにならないといけないと思うが、現場で働く者にとっては事務的な手間が多すぎて手が回らない。
- ・ 自分としては研究者の意見も聞きつつ施工後の状況などをしっかりと把握して登山道整備を行なっているが、登山道整備のやりすぎや、これはダメだろうという整備をする人もいる。「やっていることはいいんだから、何故止めるんだ」と言われることは、全国の他の地域でもある。そうならないために、正しい施工が行われるような方向に登山道部会が進むよう協力したいと思って部会に入った。
- ・ しかし、実際は各人がやりたいようにやりたいことをやっている場合も多いし、研究者の方が数値を示し原因は言ってくれるが、そんなことは現場を見ていればわかるので、それをどうしたらいいのか具体的な答えがわからない。現場の記録をもっと細かくとって欲しいといった要望などが来るが、いちいちそれを各種現場でやっていくのは不可能。
- ・ ボランティアでやりたいと思ったら、自分で資金を稼いで、事前に記録をとり、計画を立て、記録を取り、設計して、施工して、モニタリングして、全部現場の人間がやらないといけない。部会には自分にとっては負担がありすぎて、部会はやめると言おうと思ってきた。今回の報告書を提出しなかったのは、自分は施工が多すぎて不可能だったため。なので、この形のまま進めるのはまずいと思う。
- ・ 今自分が話しているのは、柵保護官が話している全体像ではなく、個別のことだが、個別のことがこの状態では、全体がうまくいくのは難しいと思う。
- ・ ただし、私たち山岳関係者よりも、自分としては登山者が変わってきていると感じている。ヒグマ情報センターで募金を集め、20日間で30万円も集まった。それでも動かないのは行政で、仕組みさえ作れば、登山者もお金を出してくれる時代になった。それを民間の一団体が構築するのは無理なので、部会を作ってやっていくのは賛成ではある。「まずはビジョンを」と言われた方もいるが、ビジョンをまとめるだけでも何年もかかってしまうので、スタートし、動きながら構築していくほうが良いと思う。人に「ここがおかしい」、「ここまで負担を掛けて良いのか」、「研究者はもっと具体的なことを言ってくれ」と言える部会なら参加したい。
- ・ 皆さんの話を聞くと「お金がない」「ボランティアでやっているんだから・・・」「昔からやっている」等々を聞きます。ですが自分は、この会場の山岳関係者よりも登山している一般人と話しているほうが希望が見える。損得抜きにやらないといけないことはあるが、損得も考えないといけない。やった分だけ収入があって、収入があるからこそ山を守れる仕組みを作らないといけない。そうなるように自分も努力したいが、この部会はかなり問題がある。ただ、話をできる場があるだけでまだいいのだと思う。

■上川自然保護官事務所

- ・今の話は歩道等維持管理作業実施手順マニュアルに基づく技術的な内容の検討についての話であり、その仕組みが2年間試行してうまくってなかったということが背景にある。
- ・それも含めて、試行錯誤しながらやり始める必要がある。必ずしもはじめに立てた青写真がうまくいくわけではない。トライ&エラーで意見を出し合って、話しやすい場を私たちも作って、私たちの連携のあり方を見直して、大雪山ならではのいいものを作っていく必要がある。その点に関して、これからも議論を続けていくことになるが、我々も頑張るので、皆さんのご理解・ご協力をお願いしたい。

4. 登山道に関する一元的な情報発信の結果について（募集したテーマに関する議論）

■上川自然保護官事務所

- ・結果について説明して議論をしたかったが、時間がなくなってしまったため、改めてメールをするので、資料14をご覧ください課題・コメントなどいただきたい。今年やってみて難しかったことが我々もあったし、皆さんも感じたことがあると思う。我々が皆さんのHPを訪ねて、そこに挙げられている情報をリンクして、一元的に情報を集約するコンセプトでやってきたのと、皆さんから直接情報をいただくようにもした。私としては、皆さんからももう少し情報をいただけると嬉しかったし、みんなで情報発信サイトを作っていく雰囲気作りが重要と思った。限られたHPシステムの中ですぐには対応できないことがあると思うが、皆さんのご意見をいただいて改善できることはしていきたいのでご協力をお願いしたい。

5. 閉会